

景観フォーラム

巻頭言

世界のとある波打ち際に小さな子供がうつ伏せになって動く気配が全くありません。この映像は世界を震撼させました。ヨーロッパに逃げる難民の不幸な出来事の風景といつてはあまりにも理不尽な子供の死です。英国のキャメロン首相は自分にも同い年くらいの子供がおり、見て見ぬふりをすることができないと嘆いておりました。

今起きている難民騒動は自然災害によるものではなく、まさしく人災そのものによる現実です。これこそ政治が起こした不幸というものでしょう。報道写真家セバスチャン・サルガドが捉えた難民の眼には人間を通り越した動物としての生命の儚さを感じられます。戦争そして難民。そういう風景をどうして創ってしまうのでしょうか。

この夏は天候不順と政治不順が織り交ぜて襲って参りました。安保法案！戦争法案などいろいろ取りざたされ、この法案の正当性を証明するがため、政治家は殆ど同じことを繰り返すのみでした。なんとという不毛な議論が延々と続きましたことか。その極め付きは“積極的平和主義”というものでした。ノルウェーの平和研究の泰斗である社会学者ヨハン・ガルトゥング（1930-）は戦争のない状態を平和と捉える「消極的平和」に対し、貧困・抑圧・差別など構造的暴力のない状態を「積極的平和」という概念を提起して、今でも老体に鞭打ち活発に世界を飛び回っております。

原発と武器の製造販売に優秀なセールスマンとして世界を駆けまわり、自らも戦争の指揮をとりたいたいと思っているのであろう日本の現首相は、恐らく草葉の陰から祖父岸信介という妖怪からきつと言われていのでしょうか。「戦争に行ってもいいが、お前だけは死なないで帰ってくるのだぞ！それこそが積極的平和主義という仮面を被った積極的戦争主義だぞ！儲かるわい！呵呵！」と。（斉藤全彦）

〈予定〉

理事会

- ・10月27日（火）JICA研究所 18:30～

景観まちあるき

- ・10月31（土）13:00～ 小田原市内

景観ワークショップ

- ・11月18日（水）JICA研究所 18:30～

運営委員会

- ・11月24日（火）飯田橋オフィス 19:00～

忘年会

- ・12月16日（水）某所 18:30～

景観セミナー

- ・1月20日（水）JICA 18:30～

「辺野古の今とこれから」



真鶴町でおきている事から

一級建築士事務所 SOGLIOLA 東亭 邦夫

建築基準法をはじめ建築関連法規は建築の安全性を第一に考えられたもので、景観とか人の営みについては考慮されていないことを前回までお話しいたしました。今回はその結果どのようなことがおきているのかを、真鶴町と言う神奈川県の小さな漁師町でおきていることを絡めてお話ししたいと思います。

真鶴町が町として最盛を極めたのは大正・昭和の初めで、いわゆる建築基準法成立以前のことで、中心市街地のほぼ全てがこの時期に作られました。日本の地方に良くある漁村に石材業の繁栄から遊郭まで作られた人口1万人の町です。山が海に迫った地形から、入江の港を中心に狭い路地や坂が多く、狭い土地を工夫しながら町が形成されてきました。しかし、現在、少子高齢化により町の人口は数千にまで少なくなっていますが、この旧市街地だけを見た場合の人口の減少率はもっと多くなっていると思われます。この人口減少は単に出生率の低下や地元の雇用だけの問題だけではなく、そこに家を建てようと思っても建てることができないと言う問題を抱えています。建築基準法上の接道義務を満たす事ができないので、新たに建物を作ることができないのです。通常4m未満の道路だったら中心から2mセットバックすれば良いと思うかもしれませんが、坂の多い真鶴ではそれすら満たすことはできず、町のあちこちに30坪未満の小さな空き地が点在しています。

このような真鶴町ですが、近年、若い方が少しずつですがこのコミュニティーに入って来るようになりました。しかも、問題を抱えている町の雰囲気の魅力を感じて、真鶴に移住してくるので、そうした人に話を聞くと、狭い路地や木製の古い建具・石積みなどに魅力を感じているのです。これらは建築基準法などによって排除されてきたものです。安心・安全を第一の法令ですが、ここ真鶴においては地域の魅力を失わせているのです。建築基準法が画一的な基準で、本来その地域に必要な魅力でさえ失わせている典型的な例です。接道する道路に問題があって消防自動車が入れないのであれば、消火栓や消防団などによって対処することも可能なはずですが、ある条件を満足したものについて、その地域に限って建築基準法の一部を緩和することは可能なことで、本来、地域の魅力は地域の人の意志に任せるべきものです。そして、法令はそうした意志をサポートするためにあるものです。地域がそれによって魅力ある景観をつくる事が可能ならば、その経済効果は計り知れないものとなるからです。

地方創生が叫ばれています。しかし、本当に地方の独自性を考えるのであれば、都市を形作る決まり事を地方に委ねる必要があるのではないのでしょうか。江戸村と言うテーマパークがありますが、もしこんな都市があつて、そこに住むことが可能だったらどんな文化が生まれるのでしょうか。そのデザインや質感を維持しながら現在の安全性や快適性を実現するためにはどのような技術が必要なのでしょうか。色々と想像は膨らみます。そこには地域を維持していく為の独自の産業や経済があり、それにより地域の独自性が保たれていくのです。

真鶴に限らず日本のいたるところにこうした豊かさの種が潜んでいます。そこに住む人の大半はそれを豊かさとは捉えていないかもしれませんが、しかし、ほんの少し手を加える事で豊かさ変わるものがあるはずですが。地域にリーダーシップをとる専門知識を持った人材や組織が必要なのかもしれません。パリの中心市街地に住む人達は洗濯物を外に干せない不自由さを受け入れ、高層ビルを排除して都市景観を維持しています。ドイツのロマンティック街道にある村では、アルミサッシの使用を禁止し、洗濯ものもパリと同じように室内で処理し、当時の建物と同じ仕様の外観を維持しています。単に利便性や合理性を追求しているではありません。今の日本に利便性や合理性を排除しても、地域の独自性を実現していく意志や創造性があるのでしょうか。せめて法律だけでもそうした自由が許容されるものであってもらいたいものです。

「3度目のアウシュビッツ」

吉川謙太郎

今夏、勤務校の海外ツアーの引率教員として、3年連続でポーランドとリトアニアに行きました。

このツアーのメインの一つは、ポーランドの「アウシュビッツ強制収容所」訪問です。

今年は事前学習の一環として、ヘイトスピーチをとりあげてみました。

最近では、一時期ほど報道等がなされていませんが、どうみても酷いとしかいいようのない状況～例えば、女子中学生がコリアンタウンで「大虐殺を実行しますよ!」と叫び、周囲の大人が喝采するというような～が現代日本に存在します。

アウシュビッツに象徴されるホロコーストも、ヘイトスピーチから始まったという側面があります。

要は、事前学習を通じ、「アウシュビッツは、昔おこった酷い出来事である」といった他人事的な感覚を、「アウシュビッツは、昔おこった酷い出来事であり、油断すると今後も同様なことがおこりかねない」といった、現代にもつながりうる問題なのだということを伝えたかったということです。

そして、自分に引きつけて考えてみて、自らの中にあるかもしれない「差別の芽」を見だし、それがあつたならば、自らの意志で摘んでもらいたいと思っています。

忘却することにかけては天才的な我々人間は、いろいろな「昔おこった酷い出来事」のことを忘れ、同じような過ちを繰り返しています。「戦後70年」といったところで、地球規模で見れば、「戦後」などはとてもいえない状況であるのは自明のことです。

そのような中、今でも、ユネスコ憲章のいう「人間の心の中に平和の砦を築く」ことの重要性が、いささかも変わらずに存在すると思われまふ。

心の中に平和の砦を築くための手段の一つとしては、「昔おこった酷い出来事」を象徴する場に身を置き、その場の空気を感じ、その場であったことを我が身に降りかかったもののように想像し、身体全体で記憶することがあると思います。身体で記憶するには、その場に行くしかないのではないか。読書などにより頭だけで理解したと思っても、忘却することはしばしばあります（私だけかも知れませんが）。

また、ポーランドの隣国であるリトアニアでは、第二次世界大戦中に、杉原千畝が日本通過ビザを発行して、6000人ともいわれるユダヤ人を救いました。ビザを発行し続けた旧日本領事館（いまは杉原記念館となっています）は、アウシュビッツの対極にある場であると思います。このツアーでは、ここにも訪問します。

アウシュビッツと杉原記念館を訪れることで、「非人間的行為の極み」と「勇気ある人道的行為」の両方を、印象深く知り、感じとることが出来ます。それにより、心の中の平和の砦をより堅固なものにしうるものと思います。私は、これが、このツアーの最大の目標であると考えています。

アウシュビッツの訪問者数は、毎年、過去最高を更新し続けているとのこと。ヨーロッパ各地の若者たちが、学校単位で訪問することが多いようです。「忘れまい」というヨーロッパ諸国の姿勢を感じました。

とはいえ、遠くアウシュビッツに行く日本人は、稀な部類に入るかも知れません。



アウシュビッツは、人類史上の「負の遺産」として世界遺産に登録されていますが、同様なものに、広島原爆ドームがあります。私は、中学3年生の修学旅行（勤務校では「研修旅行」といっています）の引率教員の一員として、ここ2年連続で広島も訪問しています（今秋も行きますので、もうすぐ3年連続になります）。

広島を学校単位で訪問する日本の若者の原爆資料館での真剣な眼差しをみていると、彼／彼女らの心の中にも平和の砦が築かれていくのだろうと感じます。

一方で、平和公園内で遊びまわったりしている若者を目にする場合があります（アウシュビッツでも、ダラダラしている若者を目にする場合もあります）。真面目そうに原爆資料館にいて、何も吸収しようとしないう若者もいます。「つまらない」「関係ない」といったふうに思う若者（若者だけではない）も現実にはかなりいるでしょう。

「夏にアウシュビッツ、秋に広島」を3年間続けられているということは、社会科教員としては非常に恵まれています。そのような教員としては、後者のような若者たちとどう対峙するべきか、深く考え、何がしかのことはしなければならぬと考えているところです。



バトゥミのレンタルサイクル

東野允彦

この夏、再びジョージアに行きました。今回は、黒海沿岸の街、バトゥミに数日滞在しました。

バトゥミはジョージア内にあるアチャラ自治共和国の首都です。古くから貿易で栄え、20年くらい前は一時独立国だったときもあったそうです。今も商工業、なかでもアゼルバイジャンからパイプラインがあり、石油化学工業が盛んであるとのこと。ですが、確かにオイルタンクやオイルを運ぶ貨車、港湾施設に伸びるパイプラインなどは見ましたが、工場は滞在中に見ることはありませんでした。

工業が盛んな地域というより、昔からの栄えている港町という雰囲気。20世紀初頭に、スターリンが同地でストライキを起こした時代のような感じが残っているような風景もあります。しかし、海側から開発が進んでいるようで、浜辺や臨海公園が整備され、リゾートマンションやホテルやカジノが立っていたり、建築中だったりします。津波のように、近代的な建築物を現代的な建築物が飲み込むようなかたちで新旧混ざった街なみです。

坂が多いトビリシとは違い、バトゥミは平地が多く、その地形を利用して観光用にレンタサイクルを置いています。主要な観光地の周辺に、無人のステーションがあり、前払い制のICカードを使い1時間50円ほどで自転車を借りることができます。ちなみに、市内を走るバスの料金も25円ほど。自転車はよく整備されていて、潮風にもさらされている割にはサビもなく、状態が悪いものはあまりありませんでした。

長い海岸線を自転車で移動するのは開放感があり、楽しく、滞在中はホテルから街の中心部に行く足として使っていました。ただ、古い街なみの方へ行くと、自動車社会であったり、道路が石畳であったり、なかなかよそ者が自転車で乗り入れるには難しかったです。自転車専用道路の延長がのぞまれます。

しかしながら、観光には、そのような不便なのは不便で、良いのかもしれませんが。歴史と文化を感じる街をゆっくり歩くと、現地の人から話しかけられたり、ビールなどの飲み物をおごってくれたり、良いこともありました。



＜L F Jブックレビュー44＞

- ①『陸軍登戸研究所と謀略戦』渡辺賢二著 吉川弘文館 2012年刊
- ②『陸軍登戸研究所＜秘密戦＞の世界』山田朗著 明治大学出版会 2012年刊
- ③『地図から消された島—大久野島毒ガス工場』武田英子著 ドメス出版 1987年刊
- ④『一人ひとりの大久野島—毒ガス工場からの証言』正刀行武著 ドメス出版 2012年刊
- ⑤『毒ガスの島—大久野島悪夢の傷跡』中国新聞「毒ガスの島」取材班中国新聞社1996年刊
- ⑥『増補新版 毒ガスの島』樋口健二著・写真 こぶし書房 2015年刊（旧版1983年刊）

戦争というものを体験していない者にとって、それが実際どういうものであるかを考えることは難しいことである。体験者の話を聞いたり、映像や書籍から得られる知識からしか判断できないのは、ある意味からすれば戦禍の中にいない“平和”に安住していることであり、それは幸せということであろう。しかし、戦時中に何が行われていたのかという真実を見つめることを怠ってはいけない、“平和”を持続可能にさせるためには。

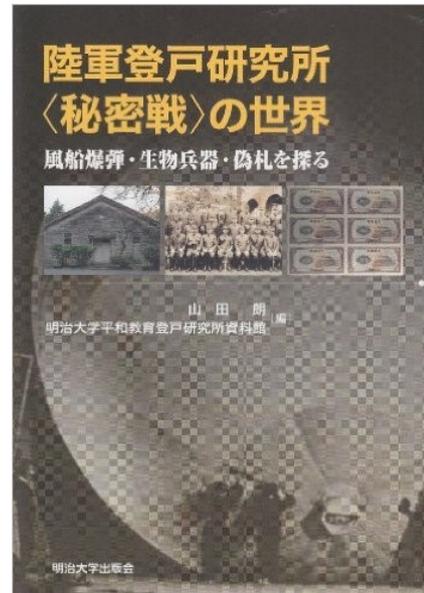
ここに戦争遺跡なるものがある。①と②で取り上げているものは東京郊外“登戸”の明治大学生田キャンパス内にあり、③・④・⑤・⑥は広島県尾道駅から西へ30キロほど行った忠海というところから対岸2キロほどに浮かぶ小さな島“大久野島”である。それらは今や大学キャンパスへ、そして瀬戸内に浮かぶレジャーアイランドへと変貌したところが、たった70年前のことではあるが、かつては生命を絶滅へと追いやる化学兵器の研究所・生産拠点であったとは想像もできない。

さて、①はかつてどのようにこの登戸研究所が誕生したかを示し、研究内容とその体制、そして具体的に物理学兵器/化学兵器/スパイ用品の研究・開発、偽造紙幣など経済謀略活動の展開を探求している。②は2010年に明治大学によって設立された明治大学平和教育登戸研究所資料館の展示内容を300ページ程にまとめたものである。さて、広島というところはアウシュヴィッツと同等に語られる戦争遺跡である。それは原爆被災という大量殺戮の場所ということからであるが、戦争は同じ広島で毒ガスという大量殺戮兵器も製造していたのである。③は⑥から刺激され一児童文学者が毒ガスという秘密兵器を組織的に研究した初めての書籍である。④は被災者も含め実際に毒ガス製造にかかわった人達の聞き取り調査である。⑤は現在の長閑な島の風景からは想像もできない戦時中の日本軍が実施しそして隠そうとした真実を暴く。⑥は初めてこの島を毒ガス製造所として写真に撮りその戦争の真実を明らかにした。

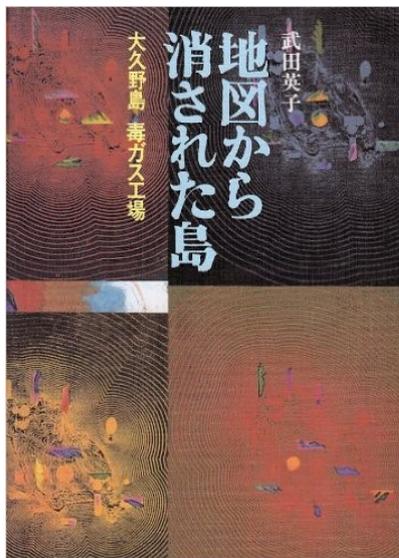
“国家は「平和のために」戦争を起こし、犠牲となった人びとをたやすく切り捨てる。” 良き景観と良きコミュニティは“平和”が堅持されてこそ持続可能であることを明記したい。（斉藤全彦）



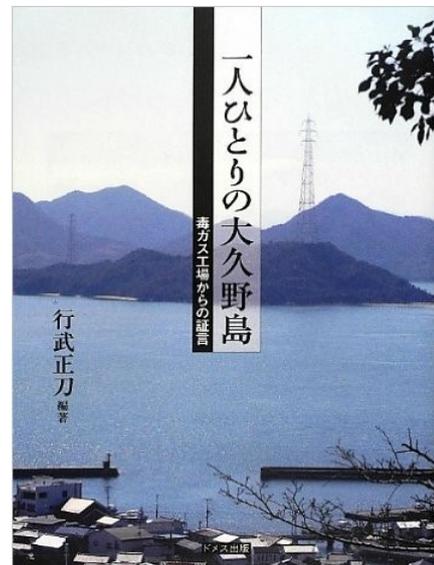
①『陸軍登戸研究所と謀略戦』



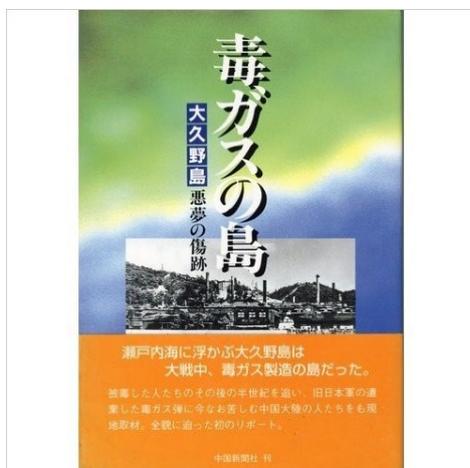
②『陸軍登戸研究所〈秘密〉の世界』



③『地図から消された島』



④『一人ひとりの大久野島—毒ガス工場からの証言』



⑤『毒ガスの島—大久野島悪夢の傷跡』



⑥『増補新版 毒ガスの島』

<LFJブックレビュー45>

『普通の人びと』C・ブラウニング著 谷喬夫訳 筑摩書房 原著初版1992年刊

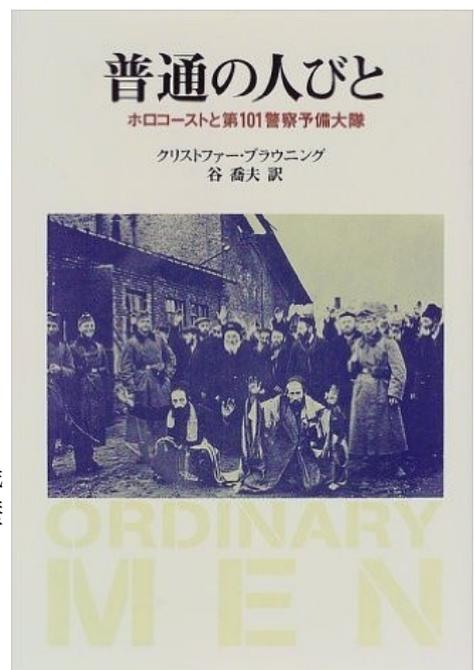
戦争と景観とコミュニティの関係について考察してゆくと、この『普通の人びと』は必読の書ではないだろうか。副題は『ホロコーストと第101警察予備大隊』というものである。普通に生活していた、歴史に特別に取り上げられる人びとではない500人という人達が、2年間で38,000人の普通のユダヤ人に対し戦争という理由で“射殺”という行為を実施した。著者の研究の発端は、第二次世界大戦終了の20年後実施されたこの500人の警察予備大隊員への裁判が残した起訴状への著者の出会いからだという。著者は隊員に対する公判前尋問からの膨大な証言を調査し、普通のドイツ人が行った大量殺戮という行為を、ある意味でアメリカ人であり歴史家という立場によって客観的研究が可能になったのではないだろうか。

「1942年3月中旬時点ではホロコーストの全犠牲者のうち、75～80%の人びとが生存していた。それからたった11カ月後の1943年2月中旬までに、この比率は丁度逆転し、なお生き延びていた者は、全犠牲者の20～25%に過ぎなくなった。ホロコーストの中心には、大量殺戮の短期集中的な高波がある。この大量殺戮の中心はポーランドにおかれていた。」という。そして、この第101警察予備大隊なるものが、戦争が激化し人員補充のため、前線には通常の招集対象とはされなかった年齢高目の通常市民が、警察の予備と称して急遽集められたのである。警察の予備ぐらいの仕事という気持ちで来た殆どハンブルグ出身の500人が送られた場所はポーランドのとある町であった。彼らがホロコーストの任命を受けたのはまさにポーランドについてからであり、“射殺”という仕事はユダヤ人に対してからで、何人もの人々が、その仕事に尻込みをし、実際“射殺”を断った人もいたという。しかし、著者はこの調査を通じて通常の市民が集団行動の通例に従い、人類史上極悪非道な犯罪への熱心な参加者に変貌してゆく様子を証明している。

ホロコーストの風景といえば、曇り空の中のアウシュヴィッツ強制収容所の遠景が脳裏をかすめ、大量殺戮が実施された場所はまさにその強制収容所ではあったが、それは凡そ600万人の中の7割であり、残りの3割は人の手で実施された“射殺”という「汚れ仕事」であったという。戦争はすべての人間に悪夢をもたらし、その夢は永久に消えないという。

戦後70年の日本は平和を選びそれを存続してきた。しかし、戦後日本人は日本人がアジア諸国でホロコーストをやったという歴史の真実を学んでいない。“歴史の真実”を学ぶことによって、私たちはアジア諸国の人びとと話し合ってみてはどうだろうか。

(斉藤全彦)



＜LFJブックレビュー46＞

『無電柱革命』松原隆一郎・小池百合子著 PHP新書 2015年7月刊

恐らく日本人の7割ないし8割近くの人びとは電柱並びにそこにぶら下がる電線に気を止めることはないであろう。天高くそびえる秋空に感動を覚える人が、ふと気付くとその周りには電柱と電線が纏わりつき、なんとまあ醜悪な景観を呈していることに驚く。それほどまでに日本人の意識に電柱電線は当たり前前に空を占有していることに慣されてきた。

明治以降日本社会は近代化という名のもとに、ライフスタイルはもとより欧米の道路並びに建築物を含めての都市計画を模倣して来たのであるが、何故か電柱電線は欧米のように地中化されず、前時代を象徴するかのようそのまま都市空間を占有している。産業革命を起こした英国はすでに百年以上前、20世紀になる頃には電柱電線の地中化は全国100%になっている。そして100年後の現在、当然ロンドン・パリは100%、ベルリン99%、ニューヨーク83%、そして問題の日本では、東京23区7%、大阪5%、京都2%ということになっている。この数値は電柱電線の地球化対策を殆ど実施してこなかったということであり、実は現在でもなお電柱は増え続けているという。それでは、同じアジア諸国ではどうなっているのだろうか。台北95%、シンガポール93%、マニラ40%、ジャカルタ35%、北京34%、ハノイ28%という具合に、アジアの都市では無電柱化が顕著に進展している。

「景観から考えるまちづくり」とは何を念頭にしたらいいのだろうか。先ず、“日本にとっての近代化とは何か”を問うことから始めるべきと考える。最近、近代化遺産なるものが人口を膾炙しているが、260年という長きにわたって作り上げて来た江戸時代文明が、一気に近代化という名のもとに否定されてきた。自己の文明を自己否定するという行為は恐らくアイデンティティーを捨て去ることに等しく、そこに提示されたものが社会の価値観でありそれが眼前にあるのが“景観”そのものではないだろうか。電柱電線が地中化されない根本的問題は、大変根が深いところにあるのではないか。

この本では「松原は社会経済学者として、国の省庁や地方自治体、電気・通信事業者や国民の意識がどのようなものであり、それらの拮抗が如何にして電柱林立の現状を齎したのかを分析してきた。また小池は政界・官界による無電柱化の働きかけ、また無電柱化基本立法制定に向けた取り組み」などが議論されている。

兎も角も、見渡すことができる“景観”には電柱電線は存在しないのが“景観”の常識であるということに改めて確認しておきたい。（斉藤全彦）



天地玄黄 ⑦「合掌造り集落の景観対策」

8月後半、世界遺産の一つである白川郷に行ってきた。
白川郷の合掌造りと周りの自然が相まって造られる風情のある景観は感極まるものだ。
しかしこれらの景観も白川村の合掌造りの涙ぐましい景観の保存があって存在するものだという事も忘れてはならない。

これらの景観は実際に歩いてみれば分かるが、ただ単純に茅葺屋根を保存すれば良いと言うような簡単な答えではないことがわかった。景観を少しでも現状のまま残すために、茅葺き替え以外にもたゆまない努力をしてきているので紹介したい。

1. 「トタン屋根の茅葺き替え」

白川郷を一望できる展望台から眺望する集落には、合掌造りではない建物も目に入る。
しかし、その建物の屋根は、一般的な赤、青、緑などの色は皆無だ。調べてみたところ、集落には一部助成して、茅葺屋根の色に合わせたトタンの色をお願いしている。

2. 「建物の景観」

集落内の建物の壁を「板壁」に統一している。建具にはサッシ建具を木製にするなど気を配っている。
その際、余分に掛かる経費は助成して貰うらしい。集落には伝統的建築物以外の建物が約440件あるということから助成金も相当な額になることは間違いない。

3. 「小さな気遣い」

民家の工事をする場合に一般的に使用される「青いビニールシート」にも気を配っている。ブルーシートは景観を阻害するとして「茶色のビニールシート」を使う配慮をしている。その割高分はもちろん助成金で賄われている。

4. 「田舎の原風景維持」

集落地内に水田が約11.9ヘクタールあるという。集落には高齢化・後継者不足等の波が押し寄せており、手をこまねいていると耕地放棄地になってしまう。これらの対策として白川郷の保存財団が無償で借り上げコシヒカリを作付けして景観を守っている。

上記以外でも集落に生活する人は様々な協力をしている。
一例を挙げれば、農業用水路の景観で水路に魚を放している。こういう光景は、昔の田舎を想像したり思い出させる。街路灯も気づかれないに最小の範囲で設定など、景観を守るために、集落に住んでる人は不便利を受けて入れている。

世界遺産を観光で見るのは景観の美しさに目をとられがちだ。しかし陰ではそれらの恩恵を受けない様々な人々のご苦労のお陰だということを忘れないようにしたい。

これらのことは白川郷に限ったことでない。観光地を訪れた際は是非このお話を思い出して頂けるとありがたい。執筆「ウラカン」より

〒150-0031
東京都渋谷区桜丘町14-5-502

TEL : 03(3780)3814
FAX : 03(6379)6681
E-mail : info@keikan-forum.com
URL : <http://www.keikan-forum.org>



Landscape Forum of Japan